

## [023]九州大学教育社会学研究集録表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4773098>

---

出版情報：九州大学教育社会学研究集録. 23, 2022-03-15. Seminar of Educational Planning, Measurement, Evaluation, Department of Education, Graduate School of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：

# 大学入学共通試験「英語」科目の経年比較研究 —日本・中国・台湾・韓国のテスト冊子の形式比較及び計量言語学分析—

キーワード：共通試験、出題形式、語彙数、語彙難易度

教育学部  
陣内 未来

## 1.目次

### 序章 共通試験の分析—課題と方法

- 第1節 問題の所在
- 第2節 先行研究
- 第3節 本研究の課題
- 第4節 分析の枠組み

### 終章 各国共通試験の難易度の変遷から見る役割の 違い

- 第1節 本研究のまとめ
- 第2節 本研究の問題と今後の課題

### 第1章 各国共通試験における問題形式の変遷について

- 第1節 日本の場合
- 第2節 中国の場合
- 第3節 台湾の場合
- 第4節 韓国の場合
- 第5節 小括

## 2.概要

これまで多くの国々で自国内の高等教育進学者を選抜するにあたり、様々な共通試験制度が作られてきた。近年、学生の国際的な流動性の高まりを背景にこれら共通試験が海外留学をする際などに評価の対象となる事例が増えている。本来、各国内の文脈において設計された共通試験が、異なるカリキュラム・学校体系を有する他国で使われることは妥当なのだろうか。共通試験は各国内の文脈で設計されたテストであるが故に、その国際通用性までは想定されていないケースが殆どであろう。ここに共通試験制度の設計と実際の適用の間に捻じれが生じている。

### 第2章 各国共通試験における語彙数の変遷について

- 第1節 各国における語彙数の推移
- 第2節 設問別の語彙数の推移
- 第3節 小括

先行研究では制度的側面に着目した研究(荒井,2021 など)と、テスト冊子に着目した研究(中島,1999 など)が独立して行われており、異なる文脈の入試選抜の中で共通試験が如何なる役割を持ち、共通試験の位置づけの変遷がテスト冊子に如何なる影響を及ぼしてきたのかは検討されていない。そこで本研究では東アジアにおける5つの共通試験(日本:大学入試センター試験,中国:高考,台湾:学科能力試験・指定科目試験,韓国:大学修学能力試験)の経年的比較を行う。また比較対象としては各国・地域の共通試験における英語科目とし、問題の出題形式と英語の語彙に着目した。

### 第3章 各国共通試験における語彙の難易度の変遷について

- 第1節 難易度の基準について
- 第2節 各国の難易度の推移(CEFR-based Vocabulary Analyzer の場合)
- 第3節 各国の難易度の推移(New Word Level Checker の場合)
- 第4節 小括

### 第4章 テスト冊子に着目した入試平均点の規定要因分析

- 第1節 平均点を従属変数とした重回帰分析
- 第2節 本研究の問題と今後の課題

第1章では、各国試験における問題形式の変遷を分析した。その結果、大学入試センター試験では各大問中における出題形式の細分化、第3問における出題形式の変化の激しさ、実践的な英語力重視の方向へと変化してきた

点が挙げられた。一方で高校は英作文において変化が見られるものの、その他の出題形式に変化が見られない。また、学科能力試験では2004年までは試験の変化が激しいものの、2005年以降は出題形式に大きな変化は無く、最初の数年は試験制度開始による試行錯誤と考えられる。指定科目試験は出題形式において一切変化が見られなかった。その為、高校・学科能力試験・指定科目試験は安定的な試験であると指摘した。大学修学能力試験は中程度の分量の文章を大量に出す形式が特徴的であり、その出題形式の性質を活かした、学際的な話題の文章が増加している点が挙げられた。まとめると第1章では、近年しばしば指摘される入試形態や能力像の多様化(南部,2018)の中で、共通試験制度が如何に変化してきたのかを整理することができた。そこからは①抑々東アジア諸国・地域における試験の出題にはかなり差がある点、②東アジア諸国の共通試験に限って言えば必ずしも同じベクトルを持って変遷してきた訳ではない、という2点が明らかになった。

第2章では、テスト冊子中の語彙数に着目した分析を行った。試験問題の全体的な語彙数からは、韓国の大学修学能力試験と大学入試センター試験の語彙数の多さが指摘できる。しかし、経年的な語彙の伸びという観点からは大学修学能力試験はほぼ語彙の増加は見られなかった。一方で大学入試センター試験と学科能力試験は開始当初から語彙数を伸ばしてきている点が確認された。この語彙の分量の増減は問題形式と密接に関連しており、大学入試センター試験における全体の語彙数の伸びは第3問と第4問における出題形式の変化による処が大きい。この出題形式と分量の増加という点は学科能力試験でも確認された。学科能力試験は2004年までは短期間で出題形式に変化がみられるが、2005年からは安定した出題がなされている。語彙数の増加も2004年ごろまでは増加幅が大きく、2005年以降の増加幅は小さい。一方で、出題形式が安定している高校と指定科目試験は語彙数の側面からも安定的な試験であると位置づけることができた。また、大学修学能力試験においては延べ語数に占める異なり語数の割合が相対的に著しく小さい為、読解に必要とされる語彙の種類が少なく、分量の割には読みやすい可能性がある。

第3章ではテスト冊子中の語彙の難易度に着目した分

析を行った。大学入試センター試験は全年度を通して語彙の難易度は維持されており、かつ殆どの年度においてB2レベルを下回っている為、各国試験との相対的な難易度では低い位置に位置づけられる。一方で、高校は殆どの年度でB2レベルを下回っているが、語彙の難易度を従属変数、年度を独立変数とした単回帰分析の結果では着実に語彙難易度を上昇させてきたといえ、係数の値も比較的高い値が確認された。学科能力試験は1994年から2020年までにB2レベルからC2レベルにまで語彙の難易度を上昇させており、試験を難化させてきた。指定科目試験では開始以来、多くの年度でC2レベルを超えており5試験の中では最も語彙難易度の高い試験であった。また、元々の語彙難易度の高さに加え、高い難化傾向にある点も確認された。大学修学能力試験はB2レベルからC2レベルを超えるまで難易度を上昇させてきた試験であり、難易度の上昇に関して係数も高い値を示している(CEFR-based Vocabulary Analyzerで0.0130, New Word Level Checkerで0.0098)。

第4章では、大学入試センター試験における各年度の平均点を従属変数にし、受験者数・テスト冊子の語彙難易度・設問別分量を独立変数にした重回帰分析を行い、上記で見えてきた語彙数や語彙の難易度がどの程度、テスト冊子の難易度(=平均点)を規定しているのか検討した。その結果、第2問において統計的に有意な負の結果を得た。なお、語彙の難易度との関連では、第2問以外の設問の語彙数は語彙難易度との相関が見られた(特に第3問、第4問、第5問の合成変数との相関係数は0.5である)。一方で第2問は語彙難易度との相関がみられなかった為、第2問に関しては、語彙難易度を經由せず平均点に影響を与えている可能性が示唆された。即ち、語彙の増加そのものが直接文法問題の難易度を上げ、平均点を下げている可能性が示唆された。議論の整理の為、以上の分析結果を簡単に表に整理すると、以下ようになる。

| 試験の名称      | 出題形式  | 語彙数   | 語彙の難易度  |
|------------|---|---|---|
| 大学入試センター試験 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・下位の設問の細分化</li> <li>・頻繁に形式の変更が見られる。特に第3問。</li> <li>・実践的な英語への志向性がある。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体の語彙数が多く増加傾向にある</li> <li>・特に第3問と第4問において増加している。</li> </ul>          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・基本 B2 レベル以下</li> </ul>                                    |
| 高考         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・英作文で実践的な英語への変更が見られた。</li> <li>・基本的には変化なし</li> </ul>                           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・比較的、増加幅は小さい</li> <li>・設問間の割合も維持</li> </ul>                          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・殆どの年度で B2 レベル以下</li> <li>・近年は B2 レベルを超えることもある。</li> </ul> |
| 学科能力試験     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・英作文のジャンルが様々。</li> <li>・基本的には変化なし</li> </ul>                                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・2004年までは増加幅が大きい</li> <li>・05年以降は増加幅が小さい。</li> </ul>                 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・殆どの年度で B2 レベルだが、近年は C2 レベルを超えている。</li> </ul>              |
| 指定科目試験     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・形式上の変化なし</li> </ul>   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体の語彙数の増加幅は小さい。</li> <li>・設問間の割合も維持</li> </ul>                      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・C2 レベルを上下している。</li> </ul>                                 |
| 大学修学能力試験   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・中程度の分量のみの出題形式</li> <li>・学際的な文章が増えつつある。</li> </ul>                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・全体の語彙数が多いが、増加幅が小さい。</li> <li>・異なり語数の割合が小さく、語彙の種類は比較的乏しい。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・B2 レベルから近年は C2 レベルを超えるようになっている。</li> </ul>                |

以上の分析から得られた知見をまとめると、以下のようになる。

第一に、これまで南部(2019)など、制度研究では東アジアの大学入試における選抜指標の多様化が指摘されてきた。しかし、その一方で、依然として選抜において信頼の厚い全国共通の学力試験(南部,2016)において具体的にテ

ト冊子がどのように変化してきたのかは論じられてこなかった。本研究からは抑々各国の試験に違いがある点は勿論であるが、経年的な方向性における差異を明らかにした点に、これまでは指摘されてこなかった大きな知見がある。

第二に、試験問題の役割の違いについてである。大学入試センター試験の問題冊子の変遷を整理すると、第3問において頻繁な出題形式の変更が見られ、出題形式の変更に伴い語彙数も増加してきた。一方で、語彙の難易度という観点からは殆ど変化はせず、かつ相対的に低いレベルが維持されてきた。その為、大学入試センター試験は比較的簡単な問題を、どれだけ早く解いていくかという「スピード検査」(D. Adkins, 1960=1970,p.46)の役割が強まってきた。大学入試センター試験は高等学校の教育内容を尊重せざるを得ない為、語彙の難易度に手を付けず形式変更とそれに伴う分量の増加によって、受験生の選抜機能を維持してきたと考えられる。対照的に、台湾の指定科目試験では出題形式の変化や分量の増加という観点から安定的な試験といえる。しかし語彙の難易度では CEFR の C2 レベルを超すほどに上昇させることでテスト冊子が難化してきたと言え、解く速度ではなく、難しい文章を丁寧に読んでいくことで得点が得られる「力量検査」(D. Adkins, 1960=1970,p.46)としての役割を強化してきた。中国の高考、韓国の大学修学能力試験についても「力量検査」の役割が強くなってきたと指摘できる。そして、この両方の側面から難化してきた試験が学科能力試験である。学科能力試験では、問題形式の変更が見られた 2004 年試験までは比較的短期間で出題形式が変更され、それに伴い分量が増加してきた。そしてその後、分量の増加幅は小さくなったが、長らく B2~C2 レベルの間で推移していた語彙難易度は近年、C2 レベルを超える程に難化した。その為、2004年までは「スピード検査」の側面からテスト冊子の難易度が上昇していたが、近年は「力量検査」(D. Adkins, 1960=1970,p.46)としての役割が強くなってきたと言える。そしてこの点は 2018 年度試験から学科能力試験の出題範囲が拡大された(高級中学 2 年までから 3 年前期の範囲まで拡大)という制度的側面からも裏付けられるものである(大学考試中心,2016,p.3)。

これまで、テスト冊子に着目した比較研究では石川(2005)が語彙数で日韓のテスト冊子を比較したように単

一の物差しで比較する場合や,井出(2014)と木下・大津(2002)のように単一年度の冊子で比較する場合などが殆どであった。しかし,ある国・地域のテスト冊子が難化したか否かは語彙数の側面から難化する場合もあれば語彙の高度化によって難化する場合もあるように,単一の物差しでは把握できない。また,2004年までの学科能力試験のように,出題形式が安定するまで試行錯誤が繰り返されている場合もあり,単一年度の比較では試験の特徴を見誤る可能性も指摘できる。その為,本研究で指摘したように,共通試験の役割を捉える為には経年的な検討が必要である。

最後に,このようにテスト冊子は各国・地域でその役割が異なるのであり,それは当該国・地域の制度的側面による影響も大きいと考えられる。その為,近年国内の教育システムの枠を超えて海外の入試でも利用される共通試験制度は飽くまで国内においてのみ通用するシステムであると結論づけることができる。

### 3. 主要参考文献

- 荒井克弘,2021,「ボーダレス化する高大接続」,大学入試センター試験企画部試験企画課[編]『「センター試験」を振り返る』,pp.45-75
- Dorothy Adkins Wood, 1960, TEST CONSTRUCTION – Development and Interpretation of Achievement Tests, Charles E. Merrill Publishing Co. (=D.アドキンス[著]池田央[訳],1970,『試験問題の作り方』日本文化科学社)
- 石川慎一郎,2005,「日韓の中高英語教育における目標語彙水準の経年的変化: 1994-2005 年度大学入試英語問題コーパスに基づく計量的調査」『神戸大学国際コミュニケーションセンター論集』,2,pp.69-82
- 木下正義・大津敦史,2002,「日本と台湾における大学英語入試問題の readability に関する比較分析—2001 年度大学入試センター試験と八十九学年度大学統合招生学科考試の英語読解問題を中心に—」『日本言語テスト学会研究紀要』5,pp.12-33
- 中島直忠(編),1999,『高等教育研究叢書 戦前・戦後高等教育機関の英語入試問題の分析』58号,広島大学大学教育研究センター
- 南部広孝,2016,『東アジアの大学・大学院入学者選抜制度の比較—中国・台湾・韓国・日本—』東信堂

南部広孝,2018,「東アジア諸国における大学入試改革の動向」日本教育学会近畿地区研究集会「大学入試のあり方を問う—国際比較を通して」